

9:40 アイスブレイク



生徒はまず、電子黒板に映し出されたアメリカの無声CMを見て訴求内容を推測し、英語で説明し合うペアワークを行った。続いて、日本の土産屋の写真が提示され、生徒はペアの相手と、店員と外国人旅行者の役を分担し、買い物の場面を想定したやり取りを英語で行った。生徒は、ジェスチャーを交えながら一生懸命やり取りをしていた。

授業
ハイライト

●3年生「コミュニケーション英語Ⅲ」の「The Legacy of Kano Jigoro」の全6時間のうちの9時間目。前時に書いた英作文を基に、グループごとにプレゼンテーションと相互評価を行った。(P.45に単元の指導計画を掲載)

主体的・対話的で
深い学びへ

実践
アクティブ・ラーニング

英語

協働学習やアウトプット活動を
バランスよく配置し、
自ら学びに向かう姿勢を育む

大西先生のアクティブ・ラーニング

模擬授業の体験から、生徒同士の
コミュニケーションを重視する指導観に転換

大西友一朗先生は、講義型の授業をしていた頃、生徒間に溝があることを課題に感じていた。「その溝は、『英語を楽しんでいる、楽しんでいる』『英語が得意、不得意』の差として表れていました。中学校時代から基礎学力のある生徒は、授業を理解して英語力を高めていきま



香川県・私立四国学院大学香川西高校

大西友一朗 おおにし・ゆういちろう

教職歴19年。同校に赴任して17年目。
特別進学コース長。進路部長補佐。
英語科主任。

香川県・私立四国学院大学香川西高校

◎上戸洋裁研究所として設立。2016年度に四国学院大学の系属校となる。キリスト教精神に基づき、人格の尊厳と自由を基盤として豊かな人間性を醸成する教育を展開。野球部や男女サッカー部、陸上競技部などが強豪として有名。

◎設立 1946(昭和21)年

◎形態 全日制/普通科・商業科・衛生看護科/共学

◎生徒数 1学年約180人

◎2020年度進路実績(現役のみ)

国公立大は、大阪大、山口大、琉球大、岡山県立大などに8人が合格。私立大は、早稲田大、立命館大、関西学院大、甲南大、四国学院大などに延べ66人が合格。短大、専門学校進学39人。就職44人。

◎URL <http://www.kagawanishikou.com/>

9:55 本文の内容の確認



大西先生が先に読み上げた教科書の本文のフレーズを、生徒が全員で復唱。次に、生徒を起立させて、各自が音読を1回する度に時計回りに90度回転し、4回読み終えて正面を向いたら挙手する活動を行った。その活動後、大西先生が本文の内容について、生徒に英語で質問し、指名された生徒が英語で答えることを数回繰り返して、本文の内容を確認していった。

9:50 新出単語の確認



生徒が各自で単語学習カードやノートを見直した後、大西先生は新出単語が書かれたフラッシュカード（*1）をテンポよく提示し、生徒全員が一斉に答えた。新出単語の確認は毎時間行っており、本単元を学ぶのは6時間目であることから、多くの生徒に新出単語が定着。カードが示されると、生徒は大きな声で単語を発音したり、意味を答えたりしていた。

すが、そうではない生徒は授業に関心も示さず、その溝は深まるばかりでした」

そうした課題意識の下、5年ほど前から参加するようになった英語教師向けの外部研修を通じて、大西先生の指導観は徐々に変わっていった。大きな変化は、生徒同士のコミュニケーションを重視するようになったことだ。そのきっかけは、外部研修で行われた模擬授業に生徒役で参加した際、教師から一方的に教えられるより、自分で考えて表現し合う学びの方が断然楽しく、理解も深まると実感したことだった。以前の授業では、インプット活動が大半を占めていたが、今では、授業で自分が説明する時間は長くても20分間とし、インプットとアウトプットのバランスを考慮して、ペアやグループで行う活動をできるだけ多く取り入れている。

個人学習と協働学習のバランスを図り、学びを深める工夫もしている。本時では、前時に単元のまとめとして取り組んだ英作文の内容を、グループでプレゼンテーションする活動を行った。「自分の考えを発表する場を設けることで、相手に伝えることを意識して英作文を書くようになり、内容が深まります。加えて、プレゼンテーションする内容を暗唱できるようにするために何度も音読をするので、スピーキング力の向上にもつながります。また、プレゼンテーションを聞いて相手の考えを知れることは、コミュニケーションが生まれるきっかけにもなります。そのように、1つの活動から様々な教育的効果

を生み出し、学びが深まるようにしています」

思考の活性化・深化への配慮

理由と根拠を持って自分の意見を述べる活動で、伝える力を鍛える

大西先生がアウトプット活動で生徒に意識するように繰り返して伝えているのが、「ARE (Assertion, Reason, Evidence)」の要素を入れることだ。本時のアイスブレイクやプレゼンテーションでも、まず自分の考えを述べ (Assertion)、それを理由 (Reason) と根拠 (Evidence) を持って説明するように指導した。「AREを意識することで、自分の思考が深まり、相手を納得させられる伝え方が身につきます。AREは、英語だけでなく日本語で話す際にも意識してほしいことであり、説得力のある小論文を書く土台にもなります」

アウトプット活動では、SDGsに関するテーマを設定することが多い。本単元では、オリンピックが取り上げられているため、持続可能な開発目標の視点から、「東京オリンピック・パラリンピック後、それらの施設をどう使うか」を英作文とプレゼンテーションのテーマにした。

「私には、世界平和に貢献できる生徒を育てたいという思いがあり、その実現に向けたコミュニケーションツールとして英語4技能が不可欠だと考えています。そのため、授業でも英語を使いながらSDGsについて考える機会を

*1 単語や語句などが書かれたカードを瞬時に切り替えていくこと。暗記などに使われる。

10:15 プレゼンテーション



4～5人のグループとなり、1人ずつ立って、自分の書いた英作文をプレゼンテーションした。聞き手役の生徒は、ループリックに基づいた内容や伝え方などに関する評価とコメントを評価シートに記入し、プレゼンテーション後には英語で質疑応答を行った。大西先生は各グループを回りながら、笑顔でうなずいたり、拍手をしたりして、場の雰囲気づくりに努めた。

10:10 プレゼンテーションの準備



生徒は、「東京オリンピック・パラリンピック後、それらの施設をどう使うか」をテーマに前時に書いた英作文のA L Tによる添削の内容を確認し、本時に行うプレゼンテーションを暗唱してできるよう、繰り返し音読練習をした。大西先生は、「聞き手の存在を意識して、大きな声で分かりやすく伝えよう」と呼びかけた。

できるだけ付けています」

英語の授業でアウトプット活動を繰り返す一方で、同校の「総合的な探究の時間」では、A L Tの指導の下、学期に1回、SDGsをテーマとした英語でのプレゼンテーションを行っている。学校全体で教科を超えたカリキュラムを構築し、英語力や思考力を相乗的に高めている。

場づくりへの配慮

間違いを恐れずに活動できるよう、 何度も声をかける

生徒に英語を使いたいと思わせる活動として行うのが、授業冒頭のアイスブレイクだ。大西先生は、生徒が関心を持ちそうな動画や画像を厳選して活動内容を準備。活動中には「英語は間違いを繰り返しながら身につけるものだから、積極的に話そう」「楽しむことを忘れないように」などと、雰囲気づくりに努めている。

「生徒が安心して英語を話せるように、声をかけています。間違いを恐れなくなると、ミスから学べることもあると気づき、ペアの相手が間違えた時にも指摘し合うようになります」大西先生は、ほとんど日本語を使わず、英語で授業を進め、タイマーで各活動の時間を区切り、スピーディーに活動を切り替えていく。

「耳から入ってきた英語を素早く反射的に発音させたり、日本語を介さず英語で思考させたりすることで、4技能の育成を図っています」

成果と課題

英語学習に積極的になり、 全体的に英語力が伸びる

大西先生が授業を変化させるに連れて、生徒は自ら英語を学ぶようになったという。

「英語学習にポジティブな生徒が増えたと感じています。そして、4技能を使う中で、『音読を繰り返したら自然と英語が出てきたから、次も音読を頑張ろう』などと、コミュニケーションの中で様々な活動の効果を実感できることが、自ら学ぶ姿勢につながっているようです。そうした主体的な学習者を生み出す学びこそ、アクティブ・ラーニングだと捉えています」

大きな成果は、どの学力層の生徒も英語力が向上していることだ。とりわけ下位層の生徒の英語力が底上げされ、課題だった英語力の差が縮まっている。昨年度の卒業生の中には、入学時に英語の模擬試験の偏差値が30台だった生徒が、卒業時には60台に上昇したケースも珍しくなかった。英語学習の楽しさに目覚め、大学でも英語を学びたいと考える生徒も増え、大西先生が担当する特別進学コースでは、外国語・国際系学部に進学する生徒の割合が、5年前の約2割から、現在は約5割にまで上昇した。

「英語が好きな生徒が増えるのは喜ばしいことです。英語を自分の目標を達成するためのツールとして生かし、世界平和に貢献する人へと成長することを願っています」

単元の指導計画

【教科・科目】英語・コミュニケーション英語Ⅲ 【分野・単元】Chapter1 The Legacy of Kano Jigoro 【テーマ・作品】東京オリンピック・パラリンピック後、それらの施設をどう使うか(グループでプレゼンをしよう) 【設定時数】全6時間の中の6時間目 【単元目標】テーマに沿って自分の意見を表現し、相手の意見を聴き、メタ認知能力を高める。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> 本文を速読し、問いに答える。 WPM(*2)でスコアをつける。 	<ul style="list-style-type: none"> 間違いを恐れず、英語で表現することができる。 これまでに学習した知識や新出単語を用いて、速読力を身につける。 <p>【知識、技能、思考力、表現力、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> アイスブレイクを行う。 新出単語の確認を、クイズ形式のプリントで行う。解答した生徒から、順次教師が答え合わせをする。隣の席の生徒とプリントを交換して、アクセントも含めて再確認する。 プリントの問題を1分間で速読した後、本文を速読する。 時間を区切って問題に取り組む。解答した生徒は、教師が答え合わせをし、ポイントを与える。 		<ul style="list-style-type: none"> 速読表にスコアを入れる。
2	<ul style="list-style-type: none"> 和訳を先に渡し、同時通訳(前半)。 	<ul style="list-style-type: none"> 間違いを恐れず、英語で表現することができる。 新出単語を覚えることができる。 音読によって、本文の内容を正しく理解し、速読力を身につける。 <p>【知識、技能、思考力、表現力、多様性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> アイスブレイクを行う。 単語を音読した後、マンプリング(*3)で単語を5分間で覚え、覚えた単語の確認をペアで行う(1問につき5秒)。 本文をマンプリングで暗唱し(5分間)、ペアで同時通訳を行う。 	<p>【対話的な学び】簡単な評価カードを作成することにより、ペアワークへの取り組みを促す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 単語シート 同時通訳シート
5	<ul style="list-style-type: none"> 本文内容(後半)の確認 本文のテーマに関する英作文 	<ul style="list-style-type: none"> 間違いを恐れず、英語で表現することができる。 新出単語を定着させることができる。 本文の内容を深く理解することができる。 <p>【知識、思考力、判断力、表現力、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> アイスブレイクを行う。 フラッシュカードで新出単語を確認する。 本文の内容に関する質問を英語でする(英語の質問文は、事前に生徒が黒板に書いておく)。 質問の答え合わせをし、難解な文章を解説する。 本文の内容に関連したテーマについて考え、自分の意見を英作文でまとめる。時間内に終わらなければ、後日提出する。 	<p>【主体的な学び】英作文のテーマについて自ら調べることにより、発表への意識を高める。</p>	
6	<ul style="list-style-type: none"> プレゼンテーション 	<ul style="list-style-type: none"> 間違いを恐れず、英語で表現することができる。 新出単語を定着させることができる。 他者の意見を聴き、自分の今後の考え方を広げることができる。 自分の意見を相手に伝えることができる。 <p>【思考力、判断力、表現力、主体性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> アイスブレイクを行う。 フラッシュカードで新出単語を確認する。 事前に返却された前時に書いた英作文について、生徒はALTの添削の内容を確認し、自分の英作文の音読練習をする。 プレゼンテーションの注意点を伝え、リハーサルを行う。 4~5人のグループとなり、生徒が1人ずつプレゼンテーションする。聞き手はループリックで評価する。 	<p>【対話的な学び】評価シートに評価者のコメント欄をつけ、発表者が評価者の意見を知ることができるようにした。</p> <p>【深い学び】SDGsにつながるヒントが得られるよう、英作文のテーマを「東京オリンピック・パラリンピック後、それらの施設をどう使うか」とした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ループリックによる他者評価

*大西先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全6時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(<https://berd.benesse.jp/>)からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

同僚の声



英語科 山中秀和先生 教室にはほどよい緊張感があり、生徒だけでなく、大西先生自身も授業を楽しむ様子が見られました。タイムアッパーで時間を区切って展開する授業は、テンポがよく、メリハリができることで、生徒の集中力は途切れていませんでした。そうした授業構成を自分も取り入れたいと思いました。

英語科 青山直樹先生 ループリックを基にした評価結果を評価シートに書き込んで相手に渡す相互評価があることで、プレゼンテーションする生徒は、明確な目標を持って音読練習をしていました。評価する生徒も、気を引き締めてしっかり聴く態勢ができ、リスニング力の向上につながると思います。

数学科 山下達也先生 テンポよく、スピーディーに展開する授業でしたが、授業についていない生徒は見あたりませんでした。題材やレベルの設定が適切であり、どの学力層の生徒も自分で考えられるからだと思います。私が担当する数学の授業でも、そうした課題設定や活動の時間配分などの工夫を取り入れたいです。

国語科、地理歴史・公民科 渡邊涼花先生 大西先生は、ペアワークやプレゼンテーションを通して、「相手の気持ちを考えて話す」「分かりやすい言葉で伝える」など、教科の枠を超えて社会で必要な力も育成していました。異なる教科の授業でも学べる点がたくさんあり、私も日本史の授業でフラッシュカードを活用しています。

*2 Words Per Minuteの略。1分間あたりに読むことのできる単語数のこと。 *3 英語学習法の1つで、聞こえてきた英語の音を小声でぶつぶつ言うように発音すること。